

歴史は、いのち共同体のたえざる再構築なり（1）

永安 幸正

目次

- （一）歴史の分水嶺を生きる
- （二）歴史は、国家といういのち集団の間の争いなり
- （三）歴史とは、いのち共同体を広げ深める道である
〈資料〉 防人の歌
- （四）歴史に紛争解決の知恵を探る

キーワード：歴史、いのち、共同体、紛争解決

（一）歴史の分水嶺を生きる

41
大地に山の^{のほくだ}上り下りの意味での^{とうげ}峠があるように、人の世には「^{せだい}峠の世代」がある。それは、またの名を「^{あいまい}曖昧世代」といえるのではないか。一個の人間の思想^{へんれき}遍歴にそれが映し出されているようだ。どんな意味

で曖昧かといえ、峠に生きたということである。

例えば、私が生まれたのはパールハーバー攻撃の年であり、一九四二年（昭和十六年）一月十三日である。攻撃が始まる年だということで、どうも急いでこの世に押し出されてきたらしい。

しかし、トンネルをくぐってこの世に出てくるとき、あは暴れ過ぎてずいぶんなんざんと難産だったという。生まれる時のことは全く覚えていないけれども、たんじょうび誕生日というものは「母親に最も苦勞をかけた記念日」なのだ、感謝しなさい、ということをつか聞いたことがある。さもありません。

専門家たちによってしばしば語られるように、日本の歴史は、制度上、かまくらばぐふ鎌倉幕府ができる時をもって、大きく変革されたと見てよい。すなわち、それまでの天皇・皇室をいたた戴き、そしてその下での朝廷という政府においてきぞく貴族・公家がじつけん実権を握って政治を行っていた段階から移って、地方に武士がたいとう台頭し、物を生産する者を支配し管理する武士団とその長が、公家にとって代わる。

その新たな武士階級が、朝廷の外に幕府という新型政府を作り、そこにおける政治の実権を握る段階へと歴史はへんかく変革された。これは日本というくにがら国柄の革命ともいえる変わりようであろう。

日本の古典と神話についての章で述べたように、日本は天皇・皇室を血縁的かつ精神的な中心として構成された民族国家と信じられた。その中心構造は依然として変化しないが、古代社会の貴族階級の勢力が小さくなり、武士階級というものが台頭したのである。

では、武士階級はどういう出自の者かと言えば、その有力部分の多くが、かけい家系をたず尋ねれば、天皇家と周辺

の皇族から分れた平家であり源氏であり、その系統を辿れる子孫であって、また極めて多くがより古く藤原氏の系統である。

それゆえ、武士の台頭とは、天皇・皇室を中心とする血縁の関係が、藤原氏などのような古代氏族の子孫を各地へ分散させ、新たに子孫の有力者の成長を生み出したということである。このことは、各地での開拓の進展と、それを担う人々の系譜を調べるとさうとう明確になる。記録がそれを裏づける。

こうした氏族・家系に注目する立場から日本の歴史の変化を眺めれば、おおよそ十世紀から十二世紀頃まで、第一次戦国時代ともいえる時期が読み取れる。それは政治と経済の実力構造を変革するプロセスである。

この意味で、日本の歴史の分水嶺は十一、十二世紀に訪れたが、その序曲は、まず関東から西の日本列島の上、壇ノ浦の戦いで平家滅亡に終わる一連の源平の戦いの前である。つまり、関東での平将門の乱（九二五〜九四〇）と瀬戸内海での藤原純友の乱（九三九〜九四一）であって、この二つを総称して承平・天慶の乱という。

東北では同じく前九年の役（一〇五一〜一〇六二）と後三年の役（一〇八三〜一〇八七）であった。いずれも、新しい階級として、日本列島各地に武士階級が勃興したのである。この時期は第一次戦国時代といえまいか。

西日本での藤原純友の乱は、源平の戦いとも重なって中国地方の奥深い山里にまでその跡を刻んでいる。

一方、平将門の乱は、平家と源氏の騒乱の先駆けであり、将門の首がここに飛んで来たとか、成田の不動尊は将門軍を祈り倒すために勧請して来たのだとか、その足跡は関東地方の常陸、上総、下総、下野、上野、武蔵の一带と、満ち満ちている。

その後の東北・陸奥に目を広げると、蝦夷を平定する前九年の役と後三年の役においても、源氏と藤原氏の仕事が必要である。二度の戦役を平定したのは、一貫して源氏の八幡太郎義家である。義家は、一一九二年に鎌倉幕府を開いた頼朝のすぐの先祖であり、平泉の藤原三代はその頼朝が減ぼす。

平泉の藤原氏とは、藤原と安倍の血を引く清原清衡にはじまる家系であった。それを亡ぼして源氏が最終的に勝利し、結局、義家以来の源氏が蝦夷と藤原とを滅ぼして、陸奥を手に入れたのであった。

東北地方では、前九年の役と後三年の役は一つのつながりの戦乱であり、安倍氏と清原氏という蝦夷の二大勢力が大和朝廷の下に統合されるといふ過程であった——前九年の役の過程を経て、蝦夷と源氏とが親密な関係となり、源氏と東国の武士とが縁を結ぶ。古典にいう「天の下、しろしめす」つまり「言向け和す」——血縁を結び所を得しめる——というような関係づけが、多少とも生まれたのであろう。

東北いわゆる東国は、こうして平家よりも特に源氏の影響が強くなり、その後の清原系統の血を引くという平泉の藤原三代の栄華と滅亡、藤原氏に対する源氏の優越、という形で源氏の力が波及した様が、各地の郷土史のほとんどすべてに物語られている。

歴史の争いとは、有力武士団の間の争いであるが、それも結局、貴族・公家と、源平のように皇族系統の武士の間の争いなのである。これは家といいういのち集団が続くか滅ぶかという問題であり、それが歴史の根本なのであった。

歴史では、制度の変化も重要であるが、こうした家系をとった人間の血の繋がりの変化こそ、より意味深いものがある。全国レベルの歴史は制度史になる。しかし、郷土史には人々のいのちの絡み合いの様相が直接に現れる。歴史の古い国であれば、われわれは、そこにおける郷土の歴史を調べなければならぬのである。

ちなみに、イスラム社会は部族社会であると言われるが、各地各国の有力者のうちの非常に多くがイスラム教の開祖ムハンマドを起源とする家系の子孫であるという。

だから、イラクやアフガンの如く、今日のイスラム社会でも、こうした郷土の歴史を知らずに、抽象的な民主主義論を押し付けると、どうしても無理が出てくるのではないか。人類の歴史とは、古層たる郷土の歴史の集合なのではないか。

現代、盛んに地域論が流行しているが、単なる空間地域ではなく、いのちの歴史を基礎とする地域であり郷土なのではないか。

いのち集団は生き続ける。十一世紀の事件処理と十九世紀の明治維新とが、遠くつながっていると読むこ

とができるのである。すなわち、前にも述べたように、ずっと歴史を下つて、長州の毛利と連合した周防の吉川氏——元就の二男が養子に入る——は、朝廷を補佐して王政復古としての明治維新の一方の勢力となつた。その吉川氏は、古代に皇室を助けた中臣鎌足の子孫つまり藤原氏南家の分流なのであり、朝廷の命にしたがつて将門の乱の鎮定に功があつた。血脈というものは、子孫に受け継がれる心とともに、歴史を貫く役割を演じるのではないだろうか。

西日本でも、関東でも、また北日本でも、その当時、各地に根づいた外来有力者たちの子孫の系統は、郷土史では名門家系として、今でもかなり明確に辿ることができるのである。歴史を家系の連続として見るのは、欠かせぬ視点ではないだろうか。

しかし、近代社会は、見逃せぬもう一つの傾向を生み出している。家系観念の希薄化・崩壊である。

一八六〇年代の明治維新と、その後百年が過ぎた一九六〇年代ともなれば、日本にはもう一度根本的な歴史の分水嶺が訪れたのではないかと思える。つまり、従来の郷土史に記録されたような家系というつながりが、地下に潜るのである。あるいは、砂漠に吸い込まれて消える川のように、水が途絶えてしまうのである。

今では、過渡期の感覚が普及し、この家系というようなものを記録し、それを辿るということ自体、価値を失いつつある。そういう家系の永続を目指すという人生観が薄弱となり、若者世代の頭脳からは全くと

いつてよいほどに、消え失せたのではないか。

学校での歴史教育においても、そういう家系の教育は行われぬ。教えるのは、制度の移り変わりだけ。

その最も深い理由は、農村・漁村という地域社会の伝統の崩壊にある。一九六〇年代から雪崩のように日本列島を覆った過疎化の波は、他方で都市化を進め、都市において「この馬の骨とも分らない者」、「隣は何をする人ぞ」として、われわれ自身を位置づける人間観、社会観を当たり前にした。馬の骨などという俗な言い方は人間差別になるとされる。先祖がどうの、親戚がどうの、というような感覚は、厄介なもの、というより知るべきでないものとなる。その傾向が、日に日に、年々、代々、優勢となるのである。

大勢は均等化、個人主義化である。身分から個人へ。

古里の崩壊は、そこに息づいていた先祖伝来のいのちの系譜を、忘却の彼方へと、捨てさせるのである。こうして、人類社会は、どこでもかしこでも、砂のような個人の集積へと変容する。家系を誇るとか、先祖からの血を笠に着る、というような気分を払拭させる。高い山は崩れる。長い糸は切れる。歴史には、一見、一切を均等にならず平均法ともいべき作用が確かに存在するのではないか。現代とは、均等化の作用が前面に出て、山をなくしていく平原形成の時代なのであろうか。

だが、はたしてそうであらうか。実は絶えず、山を造ろうとする反対の作用も、歴史には働いているのではないか。見えない者には見えない。リーダー待望論が繰り返し叫ばれ、エリート教育が、独創性への要求と

ともに、飽きもせず唱えられるのは、ゆえなしとしないのではないか。

地方の歴史にも分水嶺はある。源氏・平家は、ともに天皇家から別れた家系であり、全国にその子孫が進出した。私の古里、柿木村を含む石見の国の一帯にも、瀬戸内海という海上での源平の争いと深い関係が生じた。

元寇、つまり蒙古襲来が深刻な国際問題であり、日本人の国防意識を高めたことは想像に難くないが、襲来の後、海岸防備の任務を仰せつかった吉見氏（吉見頼行）という者が、能登の国から西石見に移って来た。時は弘安五年（一二八二）。吉見氏は鎌倉幕府の源頼朝の弟、源範頼の子孫である。その後、吉見氏は、津和野に城を築いて一帯を支配していた。

そして、正和年中（一二三二〜一九）に、その吉見氏を頼り、瀬戸内水軍の雄、河野氏の一族、弥十郎通弘という者が、瀬戸内から石見の山中に移って来た。現在の六日市町、下高尻というところである。河野氏は、瀬戸内での源平の戦いのとき、平家に対立し源氏に味方したという深い縁故があったからである。元寇では、河野氏の祖先である河野道有が敵の船によじ登り、敵をやっつけたという勇猛な話が——教科書には絵も——伝わっている。

柿木村は、元々見迎村と呼んでいたらしいが、慶長の検地ときに役人の宿舎とされた家に柿の巨木があり、そのことから柿木村と名づけられたという。やがて平成の合併で六日市町と結び、吉賀町となる予

定。

この柿木村にも、隣村から河野氏が進出し、一大勢力を張ったようで、各所に河野姓の家が散在する。その河野氏の一人が、斎藤と姓を改め、城を築いて力を振るった。その家系は今も当地に残って続いている。

この地方については、『吉賀記』という古記録がある。わが柿木村は、森鷗外先生の古里、津和野とは山一つ踰えたところ。津和野は子供の頃、何回か訪ねたことがある。地名・津和野の由来は盆地で「ツワブキ」が多かったことによるそうだ。

このほど私の故郷、柿木村の村史が完成した（『柿木村史』全二巻、役場内・村史編纂委員会、平成十五年）。この村は比較的資料が豊富に残されているということである。柿木という地名の由来がこの『村史』に出ている（第一巻、二八七ページ）。明治二十一年（一八八八）に明治政府から、浜田県の下で村制が認められた。以来、合併をすることなく、明治時代の姿をよく留めている村である。

歴史の中軸は、人間のいのちの系譜であるが、まことに興味深いものがある（『吉賀記』による。『柿木村史』第一巻、二八六〜八八ページ）。

しかし、諸行は無常、一六〇〇〜七〇年頃から、過疎化現象が激しく、人がいなくなつて崩壊寸前の集落が多い。各地の村史を繙いて思うに、わずか一世紀あまりの期間で、人間の社会はかくも移り変わるもの

か、嘆ぜざるを得ない。

森鷗外よりもっと大昔の話題には、柿本人麻呂の古里益田があり、雪舟の庭園とか山水画があちこちに残るところでもある。もとは大内氏の山口文化圏でもあり、半島・百濟出身の血を引くという大内氏の勢力が及んだ地方である。

峠の山の中には、唐人屋敷という所もあり、古来、唐の人が住んでいたかと思うが、その実は、前掲『柿木村史』（第一巻、三三七ページ以下）によれば、秀吉の文禄・慶長の役によって日本に連れ帰られた李郎子という人の住んだ所という。

なお、辞典によれば、唐人は唐土とも書いてトウジンと読んだらしいが、唐人とは、唐の人、異人、外国人、さらには物の道理の解らぬ愚か者、といった意味にも使ったようだ。私もそういう使い方をされて、「お前はトウジンだ、アホウだ」とよくからかわれた（石井進『中世のかたち』中央公論新社、二九八〜九九ページ）。日本文化にも人間差別の要因には事欠かない。

私の世代は、幼時は概ね大東亜戦争の戦中だが、物心ついた時代が戦中でもなく、かといって全然戦争を知らないという完全なる戦後でもない。いわば「峠の頂上」世代なのである。価値観が鬼畜米英からアメリカ様々へと、ひっくり返った時であった。

私らより一回り年上の世代に属するが、軍隊教育を受け、仲間には特攻に散った人もある戦中派、七十

歳台の先輩学者の一人が、「お前たちの世代が一番責任遁れの世代だ」と私どもを批判なさる。そうかもしれない。しかし、生まれ年は自分では左右できない。

私は、昭和十六年（二九四一）という戦前生まれではあるけれども、全員、戦前に対して郷愁——優越か反感か——を持ち続けている戦中派世代の方々の心情には、少し理解の届かないところがあるのを感じる。それゆえ、

「戦後は一切が狂った、戦前はみな良かった」

「戦前日本は悪かった、戦後のほうが良い」

そう簡単に言えないのではないかと、少し斜に構えてしまう世代に属する。

竹槍で本土を防衛しようという話などを聞くと、その心意気は分かるが、はたしてそれで敵を倒すつもりだったのか、と疑問に思ったものだ。私の村は、広島も遠くはないから、原爆の被害もすぐに伝わり、終戦後、爆撃の跡もこの目を見た。しかし、子供ながらに、アメリカは、憎いというより、「すごいな」と感じたものである。子供ながらの後知恵 (the second thought) であった。

それとともに、最近、日本の戦争を実体験としては知らない「完全戦無世代」が、戦争を「マンガ的に賛美する」感覚や、戦争を「宇宙戦艦ヤマト」とかなんとか言ってカッコイイと描写するような戦争観には、「おやおや、ちょっと待てよ」と驚く世代でもある。私も飛行機乗りには憧れた。眺めているだけなら、確か

に戦争はカッコヨサも、スリルも、ある。……

特攻隊の話は、その英霊を出した家が同じ「部落」——今でいう集落——のうちにあったから、少しは知っている。父の兄の一人は沖繩戦に散った。それゆえ、私個人の心情としては、大東亜戦争を無下に「愚かなことだった」「犬死だ」と否定し、流し去ることは出来ない。英霊を愚かな狂気の人々と同じだと片付けることは、到底出来ない、という気持ちは拭えない。

一方、大学時代には、安保反対運動に揺れた。一九六〇年、東京に出てきてすぐさま、毎日、「アンポー、ハンターイ、キーシー、タオセ」(安保、反対、岸、倒せ)というシユプレツヒコールの嵐で、授業どころでなかったという体験をした世代でもある。デモにも行った。近頃のノンポリとは少し訳が違った。そういうノンポリを許さないような、時代の激流が渦巻いていたのである。

こういう次第ゆえ、私らの世代は「曖昧世代」なのである。どっちつかずの、どっちかにつけない世代なのである。だから、歴史を学ぶといっても、戦前日本は全く誤りがなかった、とは到底思えないし、反対に、日本は良いことは何もしなかった、という完全自虐の歴史観にも同調できない。台湾では、水利事業など、日本は間違いなく随分と優れた遺産を遺したのである。

だから、私たちの世代は、同じ物事を見るにしても、用心深く、「いろいろな角度から見ると」という癖がある。物事は一筋縄では行かないのだ、という心理が強い。

一九四一年のパールハーバーから始まった日本の運命のことを前に述べたが、時間の流れに沿って物事を因果的に辿れば、善きことが悪しきことを生み出す因となり、悪しきことが善きことを生み出す因ともなる。

悪因悪果、善因善果などといっていても、ひっくり返ってしまふ。では、決まった因果法則など、人間界の歴史にはないのだろうか。やはり、「ある」と言うのが、今のところでの私の信念 (belief) である。これは、ささやかながら、自分の体験に基づく。

むろん、

「報いぞと見るは愚の心 かなしきことにつけ 悪しきことにつけ」（一休さん）
だから、因果に執着してはいけない。執着するといのちを潰すことになる。

これまで、この信念をあれこれと確認してみたのが、このノートであるともいえる。おかしな推理がたくさん忍び込んでいたのではないかと危惧するが、読者の皆さんからのご批判をいただければ幸いである。と同時に、あれこれと調べて、思い、書き綴りながら、先人が迷いつつ歩み、歴史を遺されたという事実を知るにつけ、その先人の方々のご苦勞の産物として、豊かな恵みをわれわれはこんなにも多く遺して頂いているのか、という実感が深まった。私にとって、歴史はつきない感動の泉である。

一九四一年生まれの私も、二〇〇一年を境に、とうとう還暦を過ぎた。歳をとると孤独になるというが、

全然孤独にならない方法がある。私はそれを発見し、その中で毎日、新しい体験をしつつある。つまり、歴史を繙くことである。伝記を読むことである。

歴史上には、対話すべき先人がいくらでもいらっしやるから、その人たちと対話すれば、毎日、少しも孤独ということはない。今、私は歴史の魅力に取り憑かれている。若い青年諸君にも、今から歴史の面白さを味わっていただきたいと思う。

歴史の中には、国民としての誇りも得られるし、個人の生き方への指針も発見できる。人として反省すべき点も学べる。歴史は先人先輩がわれわれにと恵んでくださった智慧の宝庫だ。

歩いてきた時間よりも、これからの人生に残された期間の方がより長い人たちのことを、「若者」と呼ぶ。しかし、若者という存在は、一面、常に過去の歴史を知らず、歴史から抜け出たがる。古い言葉を学ばなくなり、古い流行歌も歌わなくなる。私もそうだった。

一体それは、なぜであろうか。

いのちというものは、因果を超えて、それ自身を創造し、新たなフロンティアを開拓するという宿命を課されている。だから、たえず表現の仕方を新調したがる。新しいのちは、新しい衣を着たがる。

博物館に行くと分かるが、超古代の化石から現代人類の化石まで、いのちは、とにかく変化してきている。ということ、否めない事実である。

（二）歴史は、国家といういのち集団の争いなり

読者の方々にとっては、以上の章で述べてきたことは、どうも「国家にとらわれた議論」が、余りにも中心となった観があるかもしれない。しかしそれは、国家を単位として歴史を見る、という今日の人類社会でのコモンセンス（共通感覚）を反映している。どこの国でも、子供たちに祖国の歴史を教えている。ただ、このコモンセンスが揺らぎ始めているのもグローバル化の今日である。

生物社会についてのエコロジという学問から見ると、所詮、人類も地球上の数多くの生命から成る生命界の一員である。今、人類の在り様は、自分たちが乗り込んでいる宇宙船地球号の底や壁を食い破りながら、お互いの国家が争っているというような様相である。

人類は、国家を単位として、争うことに血道を上げている暇など無い。

とはいっても、国家をなくすれば問題がなくなるといってもでもない。ここに難しきがある。やはり、国家を基本単位とするいのち集団の作り方が、現段階の人類にはふさわしいだろう。いくらグローバル化といっても、いきなり国家を否定するのは無理であろう。

現代主流の思想傾向では、国家を超えたグローバルな市場を作りさえすれば、争いはなくなると考えている。しかし、それは空想ではないのか。少なくとも二十一世紀の見通せる将来には、国家も争いも無くせない。

いだろう。

人類は、国境を越え市場で売り買いするものだけを食って生きていくのではない。国民といういのちの集団と国土を防衛しなくてはならぬ。人類は、大枠として、国家という単位で棲み分け、その上で交易を通じて共生するほかにはないか。

農業を例にとれば、今は世界的に機械化農業が本流であって、機械に合わせて水田をできるだけ大きな区画へと拡張し、トラクターを能率よく動かせるようにする。区画のための畦など取り払って、ヘリコプターで種を蒔くようにすればよい。これこそは、まさに現代の「機心」である。

機心というのは、中国古代の『莊子』に出てくる言葉である。農民が足踏み式の水車で水を汲み上げ、水田に灌漑を行っていると、旅人が通りかかって、「なぜ跳ね上げポンプを使わないのか」と問いかける。それに答えて農夫のいうには、

「そつすれば楽になるということは、知らないことはないけれども、そつなると、人手を省き楽をしたい、という邪心が沸いてくる、それが怖い。」

機心とは、この邪心のことを指す（『莊子』岩波文庫）。

こういった種類の心の問題もあるが、ここではもつと別の方向で問題に注目しなくてはならないだろう。

それは、あまりにも広い区画の田圃を作ると、リスクが大きすぎるものになるということ、また文化の違いを無くする恐れがあるのであって、その恐れを無視する薄っぺらな心が蔓延するということ、この二点であ

る。

田圃には風が吹き付ける。すると大波おきなみが立つ。小さい稲の苗なえが吹き流される。波にもまれて葉が千切れる。

リスクは、市場では特に通貨投機てきのリスクという形で現れ、投機は一つの国民経済くらいいいとも簡単に吹き倒すことができるのである。またM&Aというものによって、会社の敵対的買収てきたいてきばいしゆが行われ、激しい会社支配の競争が行われるようになる。資本主義の荒々あらからしい本性が暴れまわる。

リスクの問題だけではない。もつと恐ろしいのは文化の画一化かくいつかである。

ファーストフード、つまりハンバーガーなどの早作りはやづく、早食いの画一食品の会社が、在来ざいらいのレストランを圧迫し、生活様式を画一化し、伝統文化を破壊することを「マクドナルド化」というが（『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部）、グローバル化だけを追求ついきゆうすると、世界中がマクドナルド化することになる。考えてみれば、スローフード、つまりゆっくりと料理し、ゆっくりと食べる、手をかけた食品があってもよいわけだ。

スーパーマーケットという商業の方式は、現代人に好まれる。一面で農業生産を支配し、家庭の料理方法を貧弱ひんじやく化した面がある。丸ごとまるの魚を料理できない、小骨こぼねなど絶対食えない、という「金持ちだが貧しい」世代せだいを大量に生み出した。ただ、スーパーから魚の切り身だけを買って帰って食べる方式は、魚の「くず」を出さず、家庭ゴミを減らすという効果もある。

しかしわれわれは、この便利さと、各国の歴史の中で培われてきた各国のローカルな文化、祖国の文化を、お互い尊重し、保存したい。もちろんこれは、法律で規制するものではないが、文化には多様性を保存したい。いな、保存しなくてはならない。

エコロジーの原則からすると、地球文明には、生産と生活の両面でローカルな多様性を保存しておかないと、環境変化が起きてきたとき、減んでしまう。牛がたった一種類の草しか食べないとすると、その草がないところ、あるいはなくなつた場合には、生きることができずに死んでしまう。人類も同様か。

人類社会はある程度多様であることが望ましい。民主主義だって、アメリカ型も、イギリス型も、日本型も、中国型も、アラブ型も、いろいろとあつてよい。地球上のいのちの永續発展のため、多様性を保存するのが歴史の知恵である。文化と国家の多様な伝統を、簡単に一つの物差によって否定し、消し去つてはならない。

ともかく、国民 (ネーション nation) とか、人種 (レイス race)、民族 (エスニックグループ ethnic group, das Volk) とどうもものは、人間のいのち集団の在り方である。それを画一化しないほうがよい。

ただし、平和な時には、そのいのち集団も内部で調和を保っているが、何かの拍子に混乱し、分裂し、争いを発する。これが困る。

日本でいえば、奈良時代以前と戦国時代が特に争いの時代であつて、日本列島全体が小さな邦(くに)に

分かれて攻撃し合った。島津、毛利、伊達、織田、豊臣、徳川などはその戦国の世の勝者であり、尼子、大内……などは敗者の名である。

こうした一つのいのち集団の中での争いや分裂は、メンバーの利害の衝突によるのであり、それも多くは他国他邦を侵してまで自分の領土を拡張しようとする、リーダーたちの浅ましい利己心と、闘争心と、面子意識とが引き起こすものであった。

殆どの戦は、単なる利己心による争いであり、それを超えた、「何か崇高なもの」などでは決してなからう。

武田信玄と上杉謙信が繰り返した「川中島の戦い」（一五五三〜六四の間、計五回）といった争いなども、傍から見ると両雄の間での、餘り意味のない唾み合いであり、鎧の削り合いであった。カルタに「敵に塩を送った上杉謙信」と詠われたけれども……

動員された民も、敵から自分たちの国を守り生命と財産を衛るためということで、真剣ではあったであろうが、過ぎてみると、その意味を発見するのに苦労したのではないか。多くの家では、働き手が野や山に死んでいった。

前にも触れた東アジア大陸上で、かの『三國志』（演義）は、古代の東アジア大陸上の歴史物語として、天才軍師・諸葛孔明にハイライトを当て、極限の面白さをわれわれに与えてくれる。だが、よく考えてみ

れば、そもそもなぜ魏・呉・蜀三国は争ったのか、全く正当な意味が見出せない。

「中原に鹿を追い覇を唱える」

という。その名目やよし。

しかし、所詮、愚行の繰り返しではないのか。誰かが他国侵略の行動を起こす、他国は反撃しないと自分が殺られるから、侵略者に歯向かう。すると侵略者もまた、同じ理屈で攻撃を仕掛けてくる……。

人類の歴史は、この種の物語に満ちているのではないか。

他国から争いを仕掛けられると、理屈抜きで武器を取って応対しなければならぬ。さもなくば、こちらが征服され滅ぼされる。

人類の国際法において、自衛権を——自然権として——国家に認めるのは、この理由からであろう。そして国連（一九四五年発足）では、安全保障理事会の認めるところによって、加盟国の軍を使う軍事行動を通じて、平和を回復させることとなった。

危急の場合には、イエスが教えたような「敵に左の頬を差し出すこと」は、現世では自滅につながるのがある。天国での永遠の生命につながるかどうかは、分からない……。

人類における争いは、現世で生きる「いのち」というものの、悲しい自存手段である。

次のような考えもあろう。そうした争いとは、人類中の別個の小さないち集団同士が、お互いに「過剰なエネルギー」を浪費する一つの方法であり、それが戦いという形を取るのである、と。

文明とか文化というものは、「過剰の浪費」の装置であり、ストレス解消のノウハウであるというのである。ゲームセンターとか遊園地の賑いも、スポーツの熱狂も、浪費の方法である、人は遊ぶ動物である、と。

そういう次第だから、争いは人類という集団のいのちにとって付き物であり、すべての争いを善悪で判断してもはじまらない、ということになる。

ところが、国と国との間というより、国の内部の小さな諸邦の間には、もう一つ別の型の分裂が発生する。ペリー来航などのように外圧がやって来て、外来パワーによる征服の危険が高まる時にそれが起きる。それはつまり、藩のように、従来の小さな邦単位に分かれていては、外国の植民地にされそうだと、時、小邦を合わせて国家を造り、外敵に立ち向かおうとする場合である。国民の皆が別々だと弱い、力を合わせれば強くなるからである。

ところが、往々にして、どういう国家の造り方をするかについて考えの違いがあるとき、それぞれの邦が分裂する。明治維新の前には、尊王派と佐幕派に分かれ、諸藩の間の分裂が深刻となった。

これは、小さな単位が新規に大きな単位に纏まろうとする際の「纏まり方についての分裂」である。

ともかく、外圧が来たときには、小さな邦を集めて一つの国に纏めねばならない。綱引きでは、各人が強くても、ばらばらに引くと負ける。小中学校で流行っている三十人でやる二人三脚では、心と体の動きを皆が完全に合わせなければ、途中で倒れる。

危機の時の内部の協力は緊急を要する。だから、侵略に抵抗する方法についての争いは、どうしても厳しい戦いにならざるを得ない。

明治維新前後、江戸とか京都では、敵対する運動グループの間で、テロは日常茶飯事であった。テロとか戦争は、既存秩序を破壊するときの、望ましくはないが、避けられない方法なのである。これも歴史が物語る悲しい真実ではなからうか。

とはいえ、テロへの対策のところで述べたように、どんな紛争でも、われわれの心の中では愛と平和主義でなければならぬ。

そして、行動においては、無抵抗のおめでたい平和主義であってはならぬ。こちらが戦いに敗れるなら、相手が侵略という悪事を働くのを許すことにもなる。ガンディーは非暴力ではあったが、無抵抗ではなかった。

現代、純粹な日本を自画自賛する日本主義者たちの中には、日本の古典に描かれた古代人は「武力抜き」の絶対平和主義者であった」などと称える傾向の人がいらっしやる。理想としてはそうでありたいけれども、現実としてはおめでたい物語解釈だと、私は見ている。正直なことに、『古事記』にも『日本書紀』にも、「戦」の記録が溢れているではないか。

希望と現実とを混同する者は、その責任を取らねばならない。

過去の物語が今後にごとまで応用できるか定かではないが、東アジア大陸の『三国志』が、外国人のわれわれにさえ面白いのは、なぜだろうか。そういうおめでたい平和主義の観念を超えて、現実に立脚し、人類一般の複雑さわまりない「いのちの悲劇性」というものを、忠実に描くからではないか。大陸の人々は、古代からロマン溢れると共に、リアリズムの面でも鋭い。

数ある争いの記録の中には、目を覆うべきものも多いが、感銘する物語も幾つもはさまっている。

だが、大きな流れとして見ると、人はそもそもなぜ争わねばならないのか、流した涙と血と殺した「いのち」はどれほどか。争いの結果、何が成果として残るのか。知れたものではない。英雄物語なども、熱狂しないで、時には冷めた目で読む必要があるだろう。

歴史は、小さな感動物語、勇壮物語に溢れている。だが、大局的に考えてみると、争い全体には、一体どんな意味があるのだろうか。

歴史は、物語を続け、警告を止めない。

「夏草や 兵どもが 夢のあと」

争いに熱中しそうになると、頭を冷やし、歴史を思い起こすことにしよう。

(三) 歴史とは、いのち共同体を広げ深める道である

戦国時代を境に、江戸時代に入つて、日本列島の上でのいのちのあり方は様変わりした。日本は、一六〇〇年代初め、鎖国によって外国との争いを自ら避ける政策を執つた。とともに、国内では、厳しい統制策を導入した。それを支えた主たる政治哲学は儒教、それも朱子学であつた。

江戸時代の鎖国は、一種の純粋な自律国家を造る営みであり、国民といふいのちの共同体を造るステップであり、意味ある効果を生んだといえる。江戸幕府の鎖国政策を批判する立場もあるが、もしも日本があの戦国動乱のまま大航海時代に参加していたならば、清国や、フィリピン諸島や、インドネシア諸島のように、欧米列強に食い荒らされていたであらう。

国内の争いに関しては、豊臣秀吉の行つた刀狩りと検地が、彼自身の狙いはともかくとして、国民国家造りにとつて根本不可欠の政策であつた。ある意味では、近代国家に向けての日本の船出をここに求めることもできよう。

刀狩りとは、武力を中央権力（武士層）に集中し独占することであり、武士を除いて人民同士の武力による争いを減らす狙いがあつた。また検地は、いのちの糧をどれだけ生産できるか、国土の能力を確認する測量だつた。

世界のリーダーを任じて威張いばっているアメリカは、カウボーイ時代に「銃狩じゅうがり」を済すませておらず、今もって銃による争いが絶えない。実はこの点で、近代国家ではなく、戦国時代風ふうの中世国家の性質を残しているのである。

ちなみに、国家社会における武器の問題について、国際比較をすると、日本は例外的な国であるということが分かる。諸外国は、今でも国民による武器の所有を認める国が少なくない。日本は、豊臣秀吉の「刀狩たがり」、明治政府の「廢刀令はいとうれい」、太平洋戦争後の占領軍による「武器引き渡し命令」と、段階的に国民の武装放棄あきらを徹底てつていしてきたのである。

欧米諸国では、家庭での武器の所有と、武器を携行けいこうして外に出ることを区別する。民兵みんべいとしては武器の保藏ぼざうと武装の権利を有することが認められる（アメリカ憲法修正第二条、一七九一年）。ただし、集会する権利は、武器を携帯けいたいしないでのみ認められる（鯖田豊之『戦争と人間の風土』新潮社、七〇ページ）。

日本列島上、古代には、未だ大多数の人々の頭に、国民というような形での「いのちの纏まりまとり」について、実感は薄かったろう。『万葉集』とか『風土記』などを読むと、都みやことか朝廷ていていについては、さすが一般人も気にかかっていたであろうと推測されるが、ほとんどの人は、甲斐武田の国人かいたけだ、越後上杉の国人えちごうさぎなどというように、郷土意識きょうとじしきのほうのほが優先ゆうせんしたのであろう。日本国民といったものは意識じしきに上らなかつたであろう。

どうも、われわれは、今から振り返って、今日の出来上がった国家と国民という意識を、遠すぎる過去にまで当て嵌めて（は）いるのではないか。歴史では、特に心実つまり心理的事実である物語では、現在の観念を過去へと容易に過剰適用（かじょうてきよう）しやすいものである。現代の国家意識や国境線をそのまま過去に当て嵌めてはならない。

国民というような集団は、お互いの利害（りがい）が共通することなしには纏（まと）まらない。外の民族との争いが同胞意識を創（つく）って強化する。特に、外国民と対立するときに浮かび上がる。ともかく、一定の領土を持つ近代国家とその国民、つまり「国民国家」という観念は、世界中、過去わずか三、四百年間の発明品である。

いちはやく十八世紀に政治革命を済ませたイギリスとフランスを除（のぞ）いて、アメリカ、ドイツ、イタリアなどの各国も、今日の形の全国的な国民というものができあがるのは、日本の明治維新（めいし）と相前後（あいぜんご）する、十九世紀も半ば（なか）に過ぎないのである。日本の近代化は、英仏は除いて、決して他の欧米に遅れてはいない。

世界史には、ほぼ相似（あい）した事件が同時期（いっせいき）に一斉（いっせい）に進むという「同時化現象」（シンクロナイゼーション）が観察（かんさつ）される。地球上では、各国のい（ち）ち集団の活動が、伝わり合い、相互作用し合うのではないか。国民国家の形成という歴史の現象もそのようなものであろう。

東アジアの過去を振り返ると、お隣の大陸では、いろいろな王朝が同時に存在し、人々に「中国」の国民（国族）という意識は希薄（きはく）であったようである。この点は、中華民国の国父（こくふ）となった孫文（そんぶん）がいたく嘆（なげ）いてい

たところであつた。孫文は、日本において行つた演説で、そのことを欠点として力説していた。次は主著『三民主義』の一節である。

外國人ハ常ニ、中國人ハ一片ノ散沙デアルト云フ。成ル程、中國人ハ國家觀念ニ對シテハモトモト一片ノ散沙デアリ、モトモト民族團體モナイ。

ケレドモ、……中國ニハ非常ニ堅固ナ家族及宗族ノ團體ガアツテ、中國人ノ家族及宗族ニ對スル觀念ハ眞ニ深イモノデアル。

例ヘバ、中國人ハ路上デ遇ツテ話ヲスルトキ、必ズ「請問貴姓大名」（貴方の姓名は何と言われますか）トヤル。ソシテオ互ニ同宗ナルコトガ判レバ、同姓ノ伯叔兄弟同様、非常ニ親密ニナル。コノ善良ナル觀念ヲ推廣スレバ、宗族主義カラ國家主義ニ擴大スルコトガ出來ルデアラウ。我等ノ失ヘル民族主義ヲ恢復セントセバ、團體ガナケレバナラナイ、非常ニ大キイ團體ガナケレバナラナイ。……

我中國ガ利用シ得ル小基礎ハ、即チ宗族團體デアル。コノ外、尚家郷ノ基礎モアル。……

中國テハ、個人ノ外ニ家族ニ重キヲ置クタメ、何事ガアツテモ、即チ之ヲ家長ニ問フコトヲ要スルコトトナツテキル。……

中國ノ國民ト國家トノ構成關係ハ、先ツ家族ガアツテ宗族ニ至リ、然後國族ト云ツタヤウニ、コノ組織ハ一級一級ト大キクナリ、條道ガアツテ紊レズ、大小構成關係ノ内部ハ實ニヨク出來テキルト思フ。

これは有名な『三民主義』に現れる。(『孫文全集』外務省調査部訳、上巻、一〇四〜五ページ。訳文一部変更、改行、句読点、ゴチ、ルビを補充。)

元朝(モンゴル)と、特に清朝(満族)——ともに異民族——の征服によって起った、漢民族の民族主義の喪失が、当時まで尾を引く大いなる欠陥である、と孫文は認識し、漢民族本来の民族主義の再建こそ、異民族支配から漢民族が独立するための「国民革命」の主眼たるべし、と考えていた。

しかし、それを越えて、孫文が大アジア主義——大中華主義——を心に懐いた人物であったことは見逃してならない点である。彼は今日のインドシナ(ベトナム辺り)からミャンマー(ビルマ)まで漢民族の支配すべき土地と考えていた。それは、大中華主義である。

次に、朝鮮半島における四百年前からの統一王朝、李王朝(李氏朝鮮、一三九二〜一九一〇)の下の人々は、自分たちをどう意識していたのだろうか。ここでは、人々には高句麗、新羅、百済という地域対立が根強く、今でもそれが尾を引く。特に、元の百済(くだら)地域とその人々は差別されるようだ。その百済と古代日本の皇室の縁は深い。

日本列島の上では、国民という観念が出来上がり、またその言葉が広がったのは、外国の脅威や圧力が身近に感じられるようになった後、明治維新以後のことである。

お上・上様(將軍)の代りに、天子たる天皇と、皇室を、精神的、道徳的な中心とし、憲法、国民教育、

徴兵制を通じて、人々の心と生活に全国的な纏まりが形成された。それが明治維新にほかならなかった。内が最もよく纏まるのは、外に敵が出来た時であらう。

日本の歴史に、外国との関係の段階をつければ、次の通りである。

① 聖徳太子 日出ずる大和の国の聖徳太子が、十七条の憲法を著し、氏族制度と政務の位とその職務を定め、隋に遣いを派遣し煬帝に外交文書を送った。これは、大陸の隋の台頭に反応したものであった。

② 後醍醐天皇と建武新政 次に、最も激しい外国の圧力は、二度にわたる元寇（一二七四、文永の役・一二八一、弘安の役）であった。そこで、後醍醐天皇は、建武の中興において、衰弱した鎌倉幕府を崩壊させ、実力主義に基いて朝廷中心の中央集権国家への改革を行おうとした。

これには元・高麗の勢力が攻めてきて鎌倉幕府を揺さぶったことと、既に述べたように宋学つまり朱子学という隣の大国の思想とが、影響を与えたと言われる。歴史を左右するのは、武力ばかりではない。思想の力はもつと大きい。

こういう「隣国との事件」を通じて段々と、日本列島上のわれわれの祖先は、「我等は同じ運命をもっているのだ」という気づき——アイデンティティ——を得たのであろう。陸奥（東北地方）から参加して博多湾で蒙古兵と相まみえて吃驚（びびくり）した。『萬葉集』に愛の歌を遺した防人の人たちも、多分そうであつたに違いない。

〈資料〉防人の歌

置きて行かば妹ばまかなし持ちて行く梓の弓の弓束にもがな

(大意) このまま妹を置いて防人に行つたなら私は恋しくてならないだろう。だから妹は、私が持つて行く梓の弓の弓束であつてくれればいい。

おくれ居て戀ひば苦しも朝狩の君が弓にもならましものを

(大意) 後に残されて慕っているのは苦しいことです。朝狩りに行かれるあなたの弓にでもなりたいものです。

葦の葉に夕霧立ちて鴨が音の寒さ夕し汝をは惚はむ

(大意) 葦の葉に夕霧が立ち、鴨の声の寒い夕には、あなたをはるかに思い慕う。

(日本古典文学大系『萬葉集 二』岩波書店、四五五ページ)

③ 明治維新 明治維新では、欧米帝国主義の外圧が決め手となった。

明治維新は、それ以前に日本列島上で起きた変革と比べれば、そのスケールと意味が断然異なる。地理において蝦夷の地、北海道も含む列島全土を巻き込み、意味において外国にも通用する憲法と近代国家組織を樹立した。

西洋と比較して何とか祖国日本にケチをつけようとする自虐的学者が、日本には今もつておられるようだが、当時、維新は日本国民が世界に誇るべき偉大な国家改革であった。

明治維新には、結局、次のような歴史の必然が顕現している。（難波田春夫『近代日本社会経済思想史』著作集第七巻、早稲田大学出版部、を参照。）

- ① 王政復古であり、国学の発達などにより、源頼朝以来の武家による幕府政治を倒壊せしめた。
- ② 関ヶ原以後、長く疎外された薩摩・長州などの雄藩が徳川氏を倒した政治的変革であった。
- ③ 下級武士が指導者となり、身分の固定により腐敗した江戸時代の封建制度を廃止し、四民平等で、全国にわたり居住・交通・通信が自由な社会を建設した。

④ 米遣い経済に立つ江戸幕府体制が、財政窮乏に陥り、瓦解した。

以上は国内発の要因であるが、以下は国際関係からくる要因である。

⑤ 西洋資本主義の圧迫が東アジアに及び、それに対抗するため、大名諸侯の間の対立を解消して、強力な統一国家を完成しようとした。

その方法として文明開化と富国強兵政策を開始した。しかし、これが悲劇の始めであり、欧米列強の築いた帝国主義の舞台に日本が——遅れて——登場し、新たな利害対立を引き起こす出発点となった。

⑥ 既に発達しつつあった商業資本とともに、殖産興業によって、さらに産業資本の自由な活動が行われる経済制度を樹立しようとした。

鎖国では食えなくなっていた日本人にとって、食えるようにするために、維新は当然、外国との間の自由交易を認める開国と結び付かねばならなかった。

(四) 歴史に紛争解決の知恵を探る

明治維新に限らず、日本史上での国家の改革というものは、紛争解決の方法という観点から意味付けするならば、概ね次の役割を演じるものであろう。

- ① 国民に対して、藩に閉じこもるより、より広く新しい利益実現への可能性を開くこと。
- ② そのことにより、それまでの狭い利害の中での争いを無くしてしまうこと。

ハーバード大学のサミュエル・ハンチントンは、一九九六年に「文明の衝突」という考えを発表して、世界に八つの文明があることを主張した。すなわち、西欧、ラテンアメリカ、アフリカ、イスラム、中国、ヒンドゥー、東方正教会（ロシアと東欧）、仏教、日本、という八つの文明である。

こうした文明は衝突する恐れがあるが、特に中国・日本・イスラム連合と、ユダヤ・キリスト教を基としたアメリカを含む西欧文明とが、衝突する可能性が高く、それを避けねばならないと力説した（鈴木主税訳『文明の衝突』集英社）。

ハンチントン自身は、多くの批判者たちが誤解して受け取ったところと異なり、決してこうした衝突を煽るのではなく、むしろどうしても避けねばならないと考えるのであって、そのために次の三つのルールを必須だとして提案する。

- ① 不干渉ルール——文明類型の中心大国が、他の文明圏の紛争に介入しないこと。
- ② 共同調停ルール——紛争を調停するための共有の手続きを作ること。
- ③ 共通性のルール——あらゆる文明類型の住民が価値観、制度、生活習慣において共通なものを探求し拡大すること。

確かにこれらは、紛争解決の重要な条件群に含まれる基礎的なルールである。

今、検討している争いの問題は、子供のいじめやケンカのことではなく、大人たちの利害の争いであるが、子供も大人もさして変わりはない。例えて言うならば、リングを巡って取り合いをする者たちに、ほらミカンも、イチゴも、バナナもあるよ、と教えれば争いは少なくなろう。これは紛争解決の方法のうち、利害の置き換えや観点の変革というものであり、歴史解釈にも当てはまる。

私の郷里の津和野藩には、その内部に幕府直轄の天領があった。現在は、日原町というところである。銅の鉱山があったかららしい。天領と藩の間には、かなりの相違があり、また対抗意識も盛んで、争いが頻発したようである。人間というものは同じなのに、住む空間に線を引いて、こちらはこちら、あちらはあちら、というふうに区別すると、頭の中にも区別が生まれ、それが何かという争いを作り出すものらしい。

この天領と藩との間にも、つまらない利害の行き違いから、激しい争いが起こり、多数の人が裁判沙汰や交渉事に時間と金と人員を費やした記録が残っている（『日原町史』下巻、一一三—一三二ページ以下、及び一一二

三九ページ)。

一つの紛争は「向川原の紛争」と呼ばれるものであった。川が合流するところがあり、合流点の流れの中に大きな岩が突き出ており、洪水のときに周囲の田圃と人家に害が及んでいた。それを藩側が手間暇かけて砕き、水の流れを通り良くしようとした。すると川の水が洪水の時に、周辺に対する水害が変化し、天領側の住民に不利のことが発生するようになったようである。

そこで、天領日原側は、天領である大森銀山(石見銀山)の代官に訴え、天領代官と藩との争いになった。この争いを解決するために、双方から関係する何人もの庄屋が出会い、交渉を進めて、事無きを得、解決に達した。

もう一つの事件は「日原・枕瀬山川入会の紛争」と呼ばれ、幕府を巻き込む大規模な争議となった。藩と天領とを貫いて流れる川は高津川といい、水質が奇麗で味のよいアユが豊富にとれる。祖父から聞いた話だが、昔、除草剤や水銀剤を使わなかった時代には、アユが代かきの頃の田圃にたくさん入り、足に当たったものだという。アユ漁は、地元(じもと)の住民にとっては、自然の恵みであり大事な収入の源であったのである。

ところが、天領の住民たちが藩との境目を越えて上流の藩の領域まで入って「繰り込み漁」というものを行った。この漁は夜間、明かりを点けて網を張り、水面をたたいてアユを驚かし、網に頭を突っ込んだアユを捕獲するというものであり、今でもよく見られる主要な漁法である。

藩側は越境して漁をしてもらっては困るというので、禁止する措置に出た。しかし、天領側の漁民はそこは入会だから、われわれが漁するのは昔からの仕きたりであると主張し、藩による禁止措置に反発、言うことを聞かなかった。

藩としては困った。あるとき藩主の亀井氏の殿様——元は天皇家の分かれ——が、その場所でアユ漁を行いアユを食べる会を催した。天領の住民は藩が自分たちの入会を無視するというので幕府に訴え出た。

それを聞いた津和野藩は、早手回しに江戸の幕府に先に訴えるという措置を取り、結果として、幕府から一方的なお咎めはなしに済んだ。天領側の漁民もある程度の入会権を認められた。しかし、藩と天領との間では通婚し合うことがなくなり、やっと明治になって回復したという。

天領側は、幕府の威光を藉りて、藩とその住民を見下げる傾向が少なからずあったのではないかと思われる。人間の性質の浅ましきは、今も昔も変りなし、であるのか。

事情は、プラスとマイナスがあり、陰陽一体であって、なかなか複雑である。一九六〇年代、私が若い頃に实地に体験した社会の変化だが、石油エネルギー革命により、それが大量に利用できる時代になった。その結果、木炭の原木産地としての山林の価値は急落した。しかも、世界中から外材を安く輸入できることになって、頻発していた山林の境界争いがほとんど姿を消した。

しかし、今日、山林の境界争いが再燃しつつある。山村では、山に頼って食えなくなった人々が山から下

りて都会に出てしまった。その人々が子供たちに遺産相続として山林を譲る年代となった。さあ、そうなる
と、山の境界を「現場」で知っている者が誰もいない。おまけに、台帳上で山林を他人に売ったりして、
所有者が村人ではなくなっているものもある。解決の糸口がつかめない争いが起こるのである。

また、土木技術が発展して、巨大な土木機械が造られ、辺鄙な山合いにもゴルフ場を造ることができると
なれば、再び土地争いが起こり、境界問題が頭をもたげてくる。それに土地を貫いて走る高速道路が人の流
れと争いを変える。

科学技術とは、一面で新たな価値の可能性を開拓し、人間のいのちの間の利害の争いを減らすが、他面で
は新しい争いを作る。禍福一体の営みではないのか。

結局、利害の争いという意味の紛争を解決するには、一つの方法として、配分すべき善を増やすほかな
い。いのちの糧（かて）が増えれば、争いは減る。

だから、国家の改革には、根源的に目に見えない秘密の課題があるのではないか。繰り返し指摘したよう
に、その秘密とは、民族古来の潜在的な霊力と生命力を蘇生させ、また新たなそれを導入し、新旧あわせて
より強大な霊力と生命力を造る、という原理である。そこから、国民の「いのちの生産力」を発揚すること
であり、それを通じて、より大きい善を生産し分配することができるようにすることである。

争いを減らす他の方法としては、人間の欲を制限することである。そうすれば、他者の持ち物を欲しいと
思つて手を出すことはなくなる。しかし、この方法は普通の人間には難しい。人間は、ほどほどの禁欲まで
しか可能でなからう。

国家改革とは、単に国家財政を切りつめるとか、身軽な政府を造るといふ部分的な改革ではないのである。そして、この原理は、国際間の紛争にも当て嵌まる。現代の改革では、この霊力・生産力の原理が、根本である。

ドイツのフリードリッヒ・リスト（一七八九―一八四六）という学者は、日本でいえば江戸時代後期の人だが、「生産力を生み出す生産力」という考えを中心に、国力というものを考えた（板垣與一『アジアとの対話』第四集、論創社、一九四ページ以下）。

どの国のいつの国家改革でも、生産力を高め、いのちとその生存手段である富の増産と分配を導く、有効な哲学を開拓しなければならないのである。

明治日本は、伊勢神道を基本とする国体論と国民道徳を確立して普及させ、それにより人々の志気と希望を高め、富国強兵という目的を、かなり上手に達成したのである。政府によるその方向づけに、国民も満足し自信を持ったのである。

維新の大業は、はじめの十年くらいは反乱もあつたりしてもたついたけれども、世界史上、当時としては実にバランスの取れた改革であつた。それが成功したわけは、一方に、虐げられてはいたが自由に物を考へることのできた下級武士たちがいて、維新の実権を握り、他方、政権に加わらない自由民権派が批判勢力として勢いを増し、バランスよく政府へのコントロール機能を演じたからであつた。

この点で、帝国憲法とともに、教育勅語——及び軍人勅諭——は、「国民道徳」創造への三拍子揃った努力であった。それを評して、保守反動一点張りのものとか、人民抑圧的のものとか決めつける評論がある。しかし、そういう主張をする人たちは、評論家の気易さに安住していて、現実創造の苦勞を知らぬ口舌の徒ではないか。

明治維新がすべての点において順調に進行したのではないことは言うまでもない。それは例えば徴兵制度の定着の際のゆらぎにも現れた。

そもそも明治維新は、西洋諸国から日本を防衛することに緊急の目的があったのであるが、そのためには強力な常備軍を設置しなければならぬのであった。そして、その目的のために明治六年、徴兵令が制定され徴兵制度を実施することが決められたのであるが、「徴兵逃れ」が各地で発生した。

徴兵逃れとは、普通の感覚ではあまり名誉なことでないから、過去の記録を現代にあからさまに発表するところは少なからう。だが、既に紹介した秋田県の『山内村史』は正直に細かな記録を紹介しており、歴史記録の依るべき客観的な態度をよく確保していて、歴史として天晴である。そして、地方住民は国家中央の政策に左右されるが、その意識の苦難を理解しなければなるまい。

その一つの資料によれば、都市部と郡部とでも、また地方毎にも幾分数字は異なるが、失踪とか逃亡という形での徴兵忌避者は、明治二十九年以前が一四四七人、明治三十年以降三十六年現在までが四〇〇四人であった（『山内村史』上巻、七七二―七七五ページ）。

他の県とか地方と比べて多いか少ないかは即断できないが、徴兵制が一般の貧しい国民にとって青天の霹靂であつたろうことは、想像に難くない。農村でも都会でも、どの家庭でも、一家の若い働き手が数年間、家を空けるのだからである。

もちろん、兵役は、厳しい訓練を伴うけれども、新たな就職口としても重要となり、またやがて国民の間に国防意識が浸透するとともに、兵隊に入ることが高い価値を帯びてくる。一概にこうした兵役忌避の数字は、人々の止むを得ずの悲しい選択の表現であつて、軍隊嫌いを表現するものでないことは、言うまでもないであろう。

いずれにしても、国家の改革というような一大変革は、そう簡単に成就するものではなく、紆余曲折は避けられないが、それでも明治維新の変革は速やかに行われたものだと言うべきであろう。

国家の建設や改革を遂行するには、どこの国でも、どの地域でも、最初は多少強権的・国権的な政治、官僚、行政のシステムが必要になる。国民とその共通精神が育っていないからである。マルクス主義による革命理論が、国家と革命にとって「前衛党」による指導を不可欠と見るのは、一理あるわけである。

国民的な個人主義に立つ成熟した民主主義の条件がまだ存在しない所では、人民大衆の知識と意識が高まるまで、いな高めるためにも、エリート階層の人々の、良い意味での指導的な働きが求められる。民主主義の母国イギリスでの貴族制への信頼、フランス革命後の混乱を収めたナポレオン帝政への国民の歓迎ぶり

を見られよ。

集団というものは、少数のリーダーなしにはうまく纏まらないし、動きはしない。「船頭多くして船山に登る」といわれるゆえんである。一人の船頭の出現を、大衆は希求するのである。

だからまず、各国とも、低開発から発展途上国へと通じる道では、先達というものが犠牲者ともなるし指導役ともなる。こういう体制を「開発独裁」という。独裁とまではいかにせよ、少々は強い政治権力が求められるのであり、それなくして、国家は始まらず動きもしない。完全な自由民主主義は理想ではあるが、理想だけでは現実の車は運転できない。

自由で平等な個人が集まって行う筈の民主主義なのに、そもそも、なぜリーダーや代表というものが求められるのか、なぜリーダーが各個人の意志を超えて行動することを認められるのか。
人類はこの点に深く思いを馳せねばならない。

この角度から、インドと中国の現代史を比較して考えてみよう。

インドは、ジャワハルラル・ネルー（一八八九〜一九六四、ネルーではない）の下で、建前としては理想的な西欧型デモクラシーの政治と、イギリスが造った官僚システム、国際語としての英語と、国語の一つとしてのヒンドウー語という共通の言語をもって、半ばソ連型の社会主義的な経済発展を目指した。それは重工業を重視する道であった。

しかしこれは、マハトマ・ガンディーが主張した農村、職人、地域コミュニティを重視するコミュニティ的發展路線に反する路線であった。ガンディーとネルーとは、路線上の対立を抱えていたのである。ガンディーの理想は、現代インドの国家社会造りの歴史からは消し去られているといつてよい。

片や中国では、毛沢東（一八九三〜一九七六）の先導する共産党独裁であつて、西欧型民主主義とは、およそかけ離れた独自の政治・官僚システムをもつて、経済発展を目指した。共産中国では、総選挙は一度も行われていない。それは農村と土法技術と人民公社という三位一体の、コミュニティを重視したラディカルな路線から出発した。

一九五〇〜六〇年代に行われた大躍進と文化大革命はその頂点であり、そのマイナスの副作用は深刻であつたという。公社はその後廃止された。

なるほど、伝えられるように、それは苦しく厳しい体験ではあつたらう。がしかし、あの広大な大陸で、全国民を熱狂の渦に巻き込み、労働の価値と集団協力の経験を持たせたことは、無下に益なしとはいえない。

歴代、貧困に人生を諦めていた人民に、あるいは孫文が嘆いたように国家のことなどそっちのけで、自己の利に眼が血走り、隙あらば目先の自利を求めて我勝ちに、と走りやすい人民には、それはまたとない学習動員の好機であつたのではないのか。国家意識などありもしなかつた人民に、それは——日中戦争における

抗日意識・ナショナリズムの高揚と接続して——全体の利益を考えさせ奮い立たせる好機として。その世代が、二十一世紀の今日、現在中国の指導者層の世代になっているのである。

歴史上の事件には、失敗のように見えて、実は後代に成功の種となるものがあるのである。一つの事件を評価するには、長い目で見るべきである。

他方、インドはどうか。皮肉にも、二十一世紀初めまでのところ、情報産業は若干勢いついているというものの、海外からの投資は中国に比べて格段に少ない。一方、中国では海外からの投資も急増し、経済は離陸に成功しつつある。

だが、双方とも国営・公営企業の赤字と民営化問題を抱えていて、変身は容易でない。一難去ってまた一難というところか。歴史はまさに「メビウスの輪」のように、陰が陽に変わり、陽が陰に転じる、ということもなのだろうか。

現在、インドは道路、鉄道、港湾、空港、電力、エネルギーというような社会資本の領域で、イギリスの遺産が腐り始め、新しい基本建設において遅れをとっている。中国はその課題を巨くクリヤーして、インドより遙か先を走っている。

基本建設というものは、まず国家が担当し、大衆参加路線を踏まえながらも、ある程度強権的に運ばないと前に進まない。しかし、基本建設がかなり進捗すると、今度は自由な民主主義に移らなければ、経済の

円滑な発展はあり得ない。

今や中国では、開発独裁型——強力な政府が主導する——政治が、さらに自由な民主主義へと変革されねばならない。しかしそれが、「共産党独裁」と矛盾しはしないか。これが当今中国の最大の宿題である。

民主主義と経済発展は、並行するというより、交差する。その交差点で現代の中国は、これまで不可欠であった実質上の独裁をいかに民主主義へと変革するかという試練に、直面しつつある。一方経済の成功が、他方政治に新たな課題を生み出す。これが歴史というものであろう。

今、国家、社会、市場のバランスが問われるのである。こうした点については、インドの優れた経済学者たちの手になる『インドの自由化』（日本経済評論社）を参照して頂きたい。

（編集注）本稿は、故永安幸正教授が二〇〇五年にまとめた、全十二章におよぶ歴史論の一部である。生前より各章ごとに掲載してきたが、今回は紙面の都合上、一章を分割して掲載することにした。後半および残り二章は、次号以降に順次掲載する予定である。なお、後半の内容は以下の通りである。

（五）歴史は、どんなリーダーを求めるか

（六）歴史論を踏まえて二十一世紀の日本国家像を描く

〈資料〉憲法第九条問題——平和の理想と歴史の現実との間の橋渡しを

〈資料〉大日本帝国憲法と日本国憲法の比較——天皇及び自衛についての国民の権利義務——

（七）地域共同体造りは可能か——民族移動問題はどうか——